

発達支援研究所ホームページ <https://smart-kids.co.jp/lab/>



スマートキッズジュニア
浦安

こどもたちの「好きな色」や「好きな形」を取り入れて完成しました。ポスターの背景は、ちぎり絵で丁寧に作り上げました。

インクルーシブ教育に向けて —日本の多様な学びの場とその実践—

帝京大学 荒巻 恵子

2022年、我が国は国連による障害者権利条約の審査を受け、日本のインクルーシブ教育についていくつかの指摘を受けました。特に、障害のある子どもたちが特別支援学校や特別支援学級に在籍している現状について、「分離教育ではないか」という問い合わせが投げかけられました。これは、障害のある子どもが通常学級で学ぶ権利を、より強く保障すべきだという観点からの指摘です。

一方で、日本の教育制度では、すべての子どもに学びを保障するため、通常の学校にも特別支援学校にも学習指導要領が整備され、「障害の有無に関わらず、すべての子どもが学ぶ権利を持つ」という理念が制度として形になっています。また日本では、特別支援学校や特別支援学級に在籍する子どもたちが、通常学級や地域の学校と関わりながら学ぶ「交流及び共同学習」が全国的に取り組まれています。

交流の形は大きく三つあります。

- ①通常学校の児童と特別支援学校の児童が、スポーツや行事を通じて交流する形
 - ②通常学級と特別支援学級の児童が、図工や体育などを一緒に学ぶ形
 - ③障害のある子どもが、自分の地域の学校の子どもたちと交流する形
- これらは地域や学校の実情に合わせて工夫され、日々の学習はそれぞれの学級で行いながら、必要に応じて交流し、お互いの学びを豊かにする柔軟な仕組みです。

さらに、日本には「通級による指導」という制度があります。通常学級に在籍しながら、必要な時だけ別室で専門的な支援を受けられる制度です。コミュニケーションの難しさや学習上の困難のある子どもが、通常学級で友達と過ごしながら、自分の苦手と向き合い、専門の先生と練習することができます。1990年代から制度化され、多くの子どもが「自分らしく学ぶための大切な支え」として利用しています。

このように、日本には

- ・通常学級で学びながら個別支援を受ける
- ・特別支援学級で学びながら通常学級と交流する
- ・特別支援学校で専門的な指導を受けながら地域の学校と活動する

など、さまざまな学びの場があります。どの学びがその子に適しているかは、一人ひとりの特性や成長に応じて丁寧に考える必要があります。多くの学校では担任や特別支援コーディネーター、スクールカウンセラーが連携し、保護者と共に最適な学び方を相談しています。



国連の勧告は、「よりインクルーシブな教育へ向かうべき」という国際的視点からの問いかけでもあります。しかし、日本の学校現場には「分離か包容か」という二択では捉えきれない、多様で柔軟な学びの実践が積み重ねられています。子どもたちは、必要な支援を受けながら自分のペースで成長できる工夫がなされています。

9月某日、市内カエデ中学校(仮名)の2年生が、近隣の特別支援学校の中学校部の生徒たちを招いて、交流を行いました(写真)。中学校の体育館では、手作りの歓迎の垂れ幕と合唱で中学部の生徒たちを迎える、カエデ中学校の生徒たちが企画したレクリエーションと、壁画の作品を共同制作しました。作品は10月の特別支援学校の学園祭で発表されました。

こうした多様な学びの場の中で、子どもたち自身が交流を通して共生社会を考えていくことや、自己選択や自己決定をしながら「自分らしく生きる力」を育むことこそ、すべての子どものためのインクルーシブ教育への第一歩だと考えています。我が国は、この豊かな実践を国際社会にも発信していく必要があります。保護者の皆さんと協力しながら、すべての子どもが安心して学び、自分らしく成長できる教育を、これからも共に考えていきたいと思います。

<中学校と特別支援学校との「交流および共同学習」の活動>



<プロフィール>

荒巻 恵子（あらまき けいこ） 帝京大学大学院教職研究科教授

子どもたちとの出会い、先生がたとの出会い、保護者との出会い。たくさんの出会いの中で、人が豊かになるのは、学校という場が、すべての人の学びの場であるためだと思います。インクルージョンが問われている多様性社会の中で、次代を生きる子どもたちの未来を、みんなで考えていくことは、現代を生きる私たちの使命です。先人たちと同様、いつの時代もよりよく生きるという「ウェルビーイング」を追究していくとき、教育の意義が見えてくると思います。皆さんとともに、一緒に考えていきたいと思います。よろしくお願ひ致します。